

## 高野房太郎略年譜

明治元年 11 月 24 日(1869 年 1 月 6 日)

高野房太郎，長崎町銀屋町 18 番地に誕生。父仙吉・母マス(旧姓山市)の長男。幼名・久太郎。家族は他に祖母カネ，2 歳半上の姉キワの 5 人。

家業は代々袴などの仕立て職人。ただし，家を継ぐべき仙吉の兄 3 人が，開国後あいついで横浜，函館に赴き起業していることは，高野家が家業のかたわら舶来織物売買に関与していたことを推測させる。

明治 4 年 8 月 2 日(1871 年 9 月 16 日)

弟・岩三郎生まれる。房太郎満 2 歳 8 ヶ月。1873 (明治 6)年ころ長崎磨屋小学校に入学。

1877(明治 10 年) 満 8 歳

一家をあげて上京。神田橋本町 3 丁目(間もなく久右衛門町に編入)で旅館兼回漕業の長崎屋を経営。主として汽船を利用して旅をする客を泊めていたものであろう。仙吉の長兄亀右衛門(高野屋)とすぐ上の兄彌三郎(糸屋)が横浜で旅館兼回漕業を営んでおり，その東京支店の役割を果たしていたと推測される。

長崎屋は客室 15 室，建坪 182.1 坪，明治 12 年刊の『食類商業取組評』で「東の大関」と東京のトップ旅館に格付け。

房太郎は，千代田尋常小学校から本所の江東小学校(後輩に芥川龍之介)へ進学。

1879(明治 12)年 8 月 26 日 満 10 歳

父・仙吉死去。房太郎が高野家の戸主となる。

1881(明治 14)年 1 月 26 日 満 12 歳

松ヶ枝町大火で長崎屋は全焼。小網町に一時転宅の後，日本橋区浪花町で旅館を再開。

1881(明治 14)年 満 12 歳

江東小学校高等科を卒業(岩三郎「兄を語る」)。満 6 歳で入学し 8 年間在学すれば，卒業は 1883 年のはず。しかし 1 年早く入学し，飛び級で進級すれば 1881 年卒業の可能性はある。

卒業後間もなく横浜境町で伯父弥三郎が経営する汽船問屋兼旅館・糸屋の住み込み店員となり，横浜商法学校第速成科 1 期生となる。

1884(明治 17)年 1 月 満 15 歳

井上仁太郎(伊藤痴遊)らと横浜講学会を結成。図書共同購入などの勉強会。2 年後の 1886 年 1 月，講学会は東京専門学校同窓会・同攻会の横浜支会となる。房太郎はその発起人の 1 人。高田早苗，岡田兼吉らの講演会を主催。

1885(明治 18)年 10 月 満 16 歳

姉キワ，井山憲太郎と結婚。井山は，東大医学部予科学生の時長崎屋に下宿。1882 年病気のため退学，郷里の肥前唐津玉島村に帰り，小学

校教員の傍ら蜜柑栽培の普及に尽力。

1886(明治 19)年 1 月 満 17 歳

長崎屋廃業。一家は横浜の糸屋彌三郎方に同居するが，間もなく伯父が死去したため，母マスは，本郷区千駄木林町，東片など東大周辺で学生下宿を営み生計をたてたと推測される。

1886(明治 19)年 12 月 2 日 満 17 歳

房太郎，パシフィック・メール会社のニューヨーク号で横浜を出航。同 19 日サンフランシスコへ上陸。間もなくオークランドで スクール・ボーイ として働くかたわら，キングスランド夫人に英会話や英作文を学んだ。

1887(明治 20)年 6 月末～8 月 満 18 歳

主家の息子らと，サンフランシスコの北にある海辺の小さな町ポイント・アリーナのガルシア製材所で働く。若い仲間と楽しい日々を過ごす。

1887(明治 20)年 10 月ごろ 満 18 歳

一時帰国。「一度東京へ帰り，長崎にあった小さい山を二百円で売り，それを資本に商ひをやるべく，再び渡航した」〔兄を語る〕。この一時帰国の際に，旧知の高田早苗が主筆であった『読売新聞』と通信員となったらしく，同年 11 月 29 日執筆の「米国桑港通信」第 1 回を皮切りに 10 本ほど寄稿。1891 年には読売新聞社 社友 となっている。

1888(明治 21)年 6 月ごろ 満 19 歳

高野房太郎，サンフランシスコ・ストークトン街 10 番地で友人と日本雑貨店を経営。しかし半年もたたず破綻。

夜逃げ同様にポイント・アリーナへ行き，ガルシア製材所で働く。ここでジョージ・マクニール編著『労働運動 今日の問題』を読み，労働運動に対する関心が目覚める。

1889(明治 22)年 3 月 17 日

高野家の家計逼迫。「此夜東京ヨリノ来信ヲ見ルニ財政困難ノ向キヲ報ズ。実ニ読ムニ忍ビザ悲惨ノ情アリ」(井山日誌)

1889(明治 22)年 10 月以前 満 20 歳

房太郎，ワシントン州シアトルに移る。シアトルは，同年 6 月の大火後，建築ブームで好景気であった。さらに半年後，大陸横断鉄道のターミナルとなってブームに沸くタコマへ移る。

1890(明治 23)年 4 月 30 日 満 21 歳

『読売新聞』に「北米合衆国の労役社会の有様を叙す」を寄稿(5.31 ~ 6.27 掲載)。日本人が最初に労働組合の積極的な意義を見出した論稿。

1890(明治23)年9月23日

『国民の友』,「労働者の声」を掲載。この無署名論文も房太郎の執筆ではないか? 労働組合,生産者・消費者生協こそが,日本の労働者の地位を向上させる鍵であると主張。

1890(明治23)年9月30日 満21歳

タコマを離れ,勉強のためサンフランシスコへ。翌年1月,サンフランシスコ商業学校別科(昼間の1年間コース)に入学。コスモポリタンホテルの客引き,移民局通訳などをしながら同年末まで,英語,簿記,速記術,算数などを学ぶ。

1891(明治24)年7月

この頃,東京の高野家の家計逼迫。知人に借金している。房太郎も,眼病のためなどで収入が少なく送金が滞っている。

1891(明治24)年仲夏 満22歳

城常太郎,沢田半之助らサンフランシスコ在住の日本人と職工義友会を創立。一方で,日本で製材工場起業のための基礎データ収集を岩三郎に依頼。

1891(明治24)年8月6日 満22歳

ジョン・ヘイズ,労働騎士団機関誌の購読継続を勧める手紙を寄こす。AFLだけでなく労働騎士団とも接触していた。

1891(明治24)年11月29日 満22歳

ガントンの『富と進歩』Wealth and Progressを購入。高賃金こそ経済発展の前提条件であるとの主張に感銘を受け,翻訳を試みる。この直後,タコマへ戻る。収入も増え,翌年にかけて経済学書多数を買い集めている。

1892(明治25)年9月 満23歳

岩三郎,帝国大学法科大学に入学。これを機に,毎月の仕送り責任を軽減し,行動の自由を求める手紙を出す。同年暮,相談のためか一時帰国。

1893(明治26)年5月 満24歳

房太郎,ワシントン州タコマに在住。夏にサンフランシスコを経由し,アメリカ中部・東部を見学する旅に出る。7月~10月31日シカゴ万博の日本商品即売所で働きながら博覧会を見学。

1893(明治26)年11月 満24歳

マサチューセッツ州の山中の小さな町,グレイト・バーリントンのホワイトニング家(ドラッグストア経営)で働く。翌年3月,この地から,アメリカ労働総同盟会長サミュエル・ゴンパーズに宛てて初めて手紙を書く。

1894(明治27)年4月下旬 満25歳

ニューヨークに移り,アメリカ海軍の水兵(食堂勤務員・給仕)となる。兵員募集用のヴァーモ

ント号乗り組み。出航まで自由時間があり,この間に各方面に手紙で問い合わせ,労働運動に関する情報収集につとめる。また,ガントンの主宰の社会経済学院(College of Social Economics)に在籍したと推測される。

1894(明治27)年6月上旬

ゴンパーズに依頼された原稿「Labor Movement in Japan」を送付。『アメリカン・フェデレイションニスト』誌10月号に掲載。

1894(明治27)年8月25日 満25歳

労働騎士団に手紙,組織の実態について情報を求める。ヘイズより返信(9月1日付)。

1894(明治27)年9月4日 満25歳

ゴンパーズと面会。その後も数回会ったり文通し,AFL日本担当オルグに任命される。

1894(明治27)年11月20日 満25歳

砲艦マチアスでニューヨークを出航。大西洋 地中海 スエズ運河 インド洋 シンガポール 香港(1995年3月6日) アモイ 長崎。4月25日~27日マチアス号長崎に寄港。この間に義兄の井山憲太郎,姉キワらと面会。しかし脱艦はせず乗務を続け,以後1年余上海,仁川など中国,朝鮮各地をまわる。

1895(明治28)年7月 満26歳

岩三郎,帝国大学を卒業。大学院に籍をおき,金井延教授の指導で「労働問題を中心とする工業経済学」を専攻。

1896(明治29)年6月18日~8月1日 満27歳

マチアス横浜寄港。房太郎は雇用期間は残っていたが脱艦帰国。未払い給与32ドル36セント。間もなく,横浜の日刊英字新聞アドバタイザー社で翻訳記者として働きはじめる。

1896(明治29)年12月上旬 満27歳

労働運動開始を決意して,城常太郎らと相談し,アドバタイザー社を退職。翌年1月26日横浜から東京本郷区東片町143に移住。労働組合法制定運動を企てるが一議員の忠告で断念。

1897(明治30)年1月16日 満28歳

『和英辞典』の編集を終える。同年12月弟岩三郎およびヘラルド記者山崎要七郎との共著として大倉書店から刊行。98年1月『実用英和商業会話』大倉書店から刊行。

1897(明治30)年2月7日 満28歳

「此日社会政策学会二列シ遂二会員トナル(日記)」。翌月6日の同会で佐久間貞一と知り合う。

1897(明治30)年3月22日 満28歳

佐久間貞一より,4月6日の工業協会総会席上での講演を依頼され快諾。1週間後に佐久間を訪ね『職工諸君に寄す』の印刷を依頼。

1897(明治30)年4月6日 満28歳

錦輝館の工業協会総会で「米国における職工の勢力」について講演。席上、自ら執筆したパンフレット『職工諸君に寄す』を配布。ゴンパース宛書簡では職工義友会主催の初会合と報知。

1897(明治30)年6月12日

「此日午後片山氏ヲ訪ヒ演説会出席ノ承諾ヲ得」(日記)。

1897(明治30)年6月25日 満28歳

職工義友会主催の「我国最初の労働問題演説会」を神田YMCA会館で開催。聴衆1200人。城、高野、佐久間、片山ら演説。「終わって高野氏は義友会を代表して期成会設立の必要を説き、来会者の賛成を求めたりしか之に応ずる者実に四十七名」。会場には多数の私服警官が配備され、以後中心メンバーには尾行がつき、私宅を刑事がしばしば訪問するようになる。

1897(明治30)年7月5日 満28歳

日本橋区北槇町池の尾で、労働組合期成会発起会開催。高野房太郎、城常太郎、沢田半之助が仮幹事に就任。8月1日 第1回月次会で正式に幹事に選出。

1897(明治30)年8月31日 満28歳

期成会、演説会で鉄工組合結成を呼びかけ。

1897(明治30)年12月1日 満28歳

労働組合期成会鉄工組合発会式、神田青年会館で開催。高野岩三郎も演説。同日『労働世界』創刊、主筆・片山潜。

1898(明治31)年前半 満29歳

横溝キクと結婚。キクは1881(明治14)年12月9日生まれ16歳。翌年3月4日長女・みよ誕生。

1898(明治31)年3月23日 満29歳

日本橋警察署に召喚され、4月3日開催予定の「期成会大運動会」の中止を勧告される。

1898(明治31)年6月26日 満29歳

期成会月次会で、トップで幹事に再選され、7月15日労働組合期成会幹事長となる。

1898(明治31)年7月23日 満29歳

東北遊説に出発。同行は片山潜ほか。大宮、福島、青森、盛岡など各地で演説会、日鉄矯正会と交流。鉄工組合の支部2を設立。

1898(明治31)年7月23日

期成会「工場法案に対する意見書」決定し、房太郎、反対運動に専心。

1898(明治31)年11月29日 満29歳

高野、期成会常任幹事と鉄工組合常任委員を辞任。後任片山潜。12.26両組織から感謝状と50

円で購入した記念品を贈られる。

1898(明治31)年12月22日 満29歳

横浜鉄工共営合資会社(生協)を開業し、房太郎これに専従。

1899(明治32)年4月15日

期成会、『労働世界』が社会主義を主張することに対し警告する投書を同紙に寄稿。

1899(明治32)年6月20日 満30歳

期成会と鉄工組合、本部を日本橋区本石町に移転。同時に高野は本部に住み込む。6月25日期成会月次会、高野房太郎・片山潜を常任幹事に選任。同日鉄工組合も高野を常任委員に選任。鉄工組合が月20円、期成会が5円を出す有給役員。

1899(明治32)年11月1日 満30歳

京橋区本八丁堀2丁目4番地に生活協同組合「共営社」を設立し、高野一家はここに住む。組合員は主として石川島造船所、沖電気の職工。

1900(明治33)年1月30日 満31歳

鉄工組合、財政難。房太郎、給与を返上し、無給で活動することを申し出て承認される。

1900(明治33)年3月10日

治安警察法公布。

1900(明治33)年6月2日

行政執行法公布。

1900(明治33)年9月1日 満31歳

同日付け『労働世界』に「高野房太郎氏は愈清国へ渡航せらるるよし」との記事。また、高野が城と天津で商店を開く計画との英文短信。

1900(明治33)年11月1日 満31歳

『労働世界』に、高野が一時帰国して北清貿易会社を設立との記事。翌年1.1付英文欄到北京に移って商店を開くとの短信。1.15付英文欄では高野がドイツ軍にあり、一時帰国してBakan(下関)滞在中と報道。

1901～1902(明治35)年 満32～33歳

青島で、在米時代からの友人・竹川藤太郎と貿易業に従事。日本の石炭を中国に輸出。

1903(明治36)年1月18日 満34歳

次女 ふみ(富美)誕生。

1904(明治37)年3月12日 満35歳2ヵ月

青島の独逸病院で肝臓腫瘍のため逝去。「同地に於て葬儀を営み、遺骨は之を東京に送り、本郷駒込吉祥寺に葬る」。同年6月26日、納骨式。

〔2004年3月12日《没後100年記念の集い》

のために 二村一夫作成〕